

稲葉穰『イスラームの東・中華の西——七～八世紀の中央アジアを巡って (京大人文研東方学叢書 13)』臨川書店 2022年 250+xv 頁

本書は、京都大学人文科学研究所教授の稲葉穰氏による著作であり、2022年3月に京大人文研東方学叢書の第2期第13巻として刊行された。一般読者を対象とした「学術書ではない」書籍であり〔228頁〕、柔らかい語り口で平易に書かれた著作である。一読して読者を、複雑かつ広大な中央アジアの世界に引き込む魅力があり、多くの人々が「こんな世界があったのか」と、わくわくした知的な世界に導かれることだろう。

本書の著者稲葉穰氏は、この地域の歴史を中心に精緻な文献研究を積み重ねてきた第一人者である。イスラーム政権であるガズナ朝研究からスタートし、ペルシア語、アラビア語、トルコ語といったイスラーム圏研究に欠かせない諸語を縦横に操りつつ、同時期の漢籍に関する深い知識をもとに、この複雑な地域の歴史を着実に明らかにしてきた。一方で、その研究には知的好奇心に溢れた洒脱な問題意識を常に垣間見ることができ、その重厚な史料研究を裏から支えてきたといえるが、本書には、その稲葉氏の個性が十分に発揮されている。本書の『イスラームの西・中華の東』というタイトルには、同じく唐とアッバース朝の交差する時空間を縦横に探索した前嶋信次へのオマージュが感じられる。本書の方法は、前嶋に代表されるような、東西の文献を他者の翻訳によらず独力で一次史料から読みこなし、精査して議論を構築するという、20世紀日本の東洋史学の最良の遺産を受け継ぐものであるといえる。

本書の章立ては以下の通りである。

プロローグ——玄奘の出立

第一部 七世紀中葉

第一章 六六一年 西域十六都督府

- 一 アフガニスタンという場所
- 二 西方に関する漢籍情報
- 三 唐の西域支配体制の再編

第二章 六六六年 東部アフガニスタンのハラジュの王国

- 一 「イランのフン」の活動
- 二 突厥勢力の登場
- 三 ハラジュ族
- 四 カーブル王フロム・ケサル
- 五 その後のハラジュ族

インターミッション——慧超の旅

- 一 パミール以東 突厥のその後
- 二 パミール以西 アラブ・ムスリムの中央アジア征服
- 三 慧超『往五天竺国伝』

第二部 八世紀中葉

第三章 七五一年 タラス河畔の戦いと悟空の旅

- 一 アッバース革命
- 二 唐と吐蕃
- 三 タラス河畔の戦い
- 四 悟空の旅

第四章 七五七年 安史の乱時に入唐した大食

- 一 安史の乱
- 二 アッバース朝東方領域
- 三 アッバース革命の後
- 四 難民と傭兵

エピローグ——悟空の帰還

章立てから一見してわかるように、本書はアフガニスタン地域を中心として、中国の唐帝国と西アジアのウマイヤ朝やアッバース朝が交差する有り様を、東西を往還する様々な諸族や政権集団の動きとともに分析している。

その具体的な内容であるが、プロローグでは、本書のタイムスパンが『大唐西域記』で知られる玄奘の長安出發(六二七年もしくは六二九年)から、新羅出身の仏教僧慧超の旅(七二〇年代)を間に挟んで、別の仏教僧悟空の長安帰着(七九〇年頃)にいたる、唐と中央アジア・インドの間を旅した三人の仏教僧の時代であること、地域は、東アジアの帝国と西アジアの帝国がきびすを接する地をあつかうことが示される。そして、「ちょっとした解くべき謎を自分なりに設定し、それがどうやって解決／解明できるかを考える、ことを目標として掲げている。

なお、稲葉氏は、史料にあらわれる地名や集団・勢力の呼称、その実態、またそれらがどの人々にどのように認識され記録されたかを、極めて慎重に扱い、記述している。しかし、以下の内容紹介では、紙幅の関係からそのような本来歴史学的には何よりも重要な態度を捨象して紹介せざるを得ない。この点、読者におかれては了とされ、各論点の詳細はぜひ本書の行論を実際に追っていただきたい。

さて、つづく第一章は、第二章から第四章にかけて「謎解き」を行っていくための準備の章である。七世紀中葉のアフガニスタン地域の地理的状況を説明しつつ、唐の西方進出の概要を示し、さらに西域支配体制の再編の結果設置された西域十六都督府の所在地を、先行研究を元にひとつひとつ比定していく。その過程で、この地域を扱うための基本的な史料の状況や、そこに登場するプレイヤー(政治／言語／民族集団)が紹介される。実は、専門外の(特に、本書評を読むようなイスラーム地域研究を専門とする)読者にとって、本書のなかで一番の難関はこの章であろう。聞き慣れない地名や集団名が頻出し、また35頁に至っては全文漢文の羅列となっている。一方で、この章は舞台設定でもあるために、飛ばしてしまうとその後の章の理解が難しくなる。できれば、最初は理解できるところだけ理解できれば良いと言うつもりで、ざっと流し読みしても良いだろう。その後で、本書読了後にもう一度じっくりと取り組むと、非常に豊かな情報をもった叙述であることが理解できると思う。ここは、ちょっと忍耐が必要なところである。

第二章からは、稲葉氏の研究の精髓が、最新の研究成果を取り入れつつ、緻密かつ極めて論理的に展開されている。まず第二章では、先述西域十六都督府のうち当時のアフガニスタンの政治情勢と関わる脩鮮都督府しゅうせんと條支都督府じょうしの性格が謎として提出され、一九九〇年代以降の考古学調査、貨幣研究、新出史料などの成果を駆使して、その謎が検討される。

第一節では、一九九〇年代に世に出たバクトリア文書群と、それに連動する貨幣史料をもとに、キダーラ、アルハン、エフタルなど「イランのフン」と呼ばれる諸勢力の動向が示される。3世紀から8世紀にかけて、クシャーン朝の統治の崩壊とともに、ヒンドゥークシュ山脈の南北では様々な政治勢力の伸張が見られた。これらの政治勢力は、キダーラ、アルハン、エフタルなどの集団である。エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴァシエールは、これらが4世紀後半にアルタイ山脈から西へ向かって民族移動した大規模な集団の一部であるとしており、稲葉によれば、これは貨幣研究における「イランのフン」とほぼ重なる集団であって、また少なくともアルハンやエフタルは、ヨーロッパのいわゆる「フン」と同じ文化背景を持つものであるとする。これらの集団はヒンドゥークシュの北においてはキダーラからエフタルへ、南のカーピシー／カーブルにおいてはアルハン勢力からネーザク・シャー貨幣を発行した集団へ、そして両者の混淆へと変遷したが、これらの過程の結果、7世紀前半にカーピシーからガンダーラを支配した王は、カーピシーを居城としたアルハン・ネーザク混淆勢力と同定され、ここに脩鮮都督府が置かれたとされる。

第二節では、これに対して、條支都督府が置かれたザープリスターンを支配していたのがテュルク系ハラジュ族の勢力であったことが論じられる。稲葉氏は、前節の結論に加え、8世紀前半の慧超の旅行記と7世紀半ばに関するアラビア語史料の検討により、7世紀前半にカーピシー＝カーブル地域を支配していたアルハン・ネーザク勢力に対して、666年以降は、それがカーブルに拠点をおくテュルク勢力に変化していることを指摘する。さらに、このテュルク勢力の実態について、まずザープリスターンを支配していた領主が唐から葛達羅支かつたつらし頡利けつり発すなわちハラジュ・イルテベルと認識されていることを論じ、それがハラジュ族であったことを指摘する。次にこのザープリスターン領主が7世紀後半にカーブルを支配する王家から自立していたこと、そのときのカーブル王がホラーサーン・テギン・シャーという人物であり、ザープリスターンに自

立したのは彼の甥であったこと、すなわちカーブル王もまたハラジュであったことを明らかにする。そして7世紀半ばには條支都督府がハラジュの支配するザブリスーンに置かれていたことから、ハラジュ勢力が、ザブリスターンからカーブルへと拡大したことを指摘する。以上の稲葉氏の行論は、緻密かつ論理的であり、隙がない。

第三節では、ハラジュ族の故地、民族系統、言語などについて、それらに関する諸説が説明される。次の第四節では、前出ホラーサーン・テギン・シャーの後継者であるカーブル王フロム・ケサルが、後世のチベットの英雄叙事詩である「リン王国のケサル」の成立に影響を及ぼした可能性が検討される。ここでは、カーブル王がアラブに抵抗する同盟の盟主となり、その事績がカシミール、そしてコータンを通してチベットにまで伝わった可能性が示唆される。そして第五節では、9世紀前半インド系王家にカーブルを奪われたハラジュが、それ以降もアフガニスタンにとどまり、その一部はデリーに進出してハラジー朝を建設、また一部はイラン高原西部に到達していたことを示す。その上で、稲葉氏は、ハラジュや、エフタルやアルハンなどを含めた、居所を変えて変化する集団を研究する際には、それぞれの集団がおかれたコンテキストが重要であることを指摘する。

この第二章の内容は、一般向け学術図書としては非常に複雑であるが、そこに描き出される過去のアフガニスタンの姿は極めて鮮烈であり、その地を往来する諸集団の姿を、多様な史料から緻密に読み解いていく有様は知的な刺激に富んでいる。「謎解き」という言葉に相応しい章であろう。

続くインターミッションはプロローグ、エピローグと呼応し、唐の慧超の旅をとおして、この地域のその後が論じられる。第一節においては、中央アジアにおける唐と吐蕃の対立、突厥第二可汗国の成立などとともに、西域における突騎施勢力の伸張とウマイヤ朝との対立、そして唐がそれらの諸勢力と対立、懐柔しつつその影響力をパミール以西に伸張する様を、第二節では、逆にウマイヤ朝の中央アジア征服の過程について、第二次内乱の後のクタイバ・ブン・ムスリムの活動に至るまでを示す。そして第三節では、この時代、七二〇年代の慧超の旅行記『往五天竺国伝』の記述を通して、スインドからソグド地域フェルガーナやパミールに至る同時代の状況とアラブ・ムスリムの東方進出を描写する。

そして第三章では、このようなアラブ・ムスリムの東方進出と唐の西域支配の結果として発生した、史上名高いタラス河畔の戦いの様相を通して、中央アジア・アフガニスタン地域の変動を検討する。同時に、この時代に同地域を旅した唐の使節団の旅程や旅行期間に「謎」があることを指摘し、これを本章の課題と設定する。まず第一節では、イスラーム側のいわゆるアッバース朝革命の経緯が近年の成果を盛り込んで示され、第二節では、唐の側の情勢として、吐蕃と唐の対立や高仙芝のパミール遠征ののち、中央アジア諸勢力内部の対立が契機となって唐とアラブの介入を招いた経緯が語られる。この結果、発生したのがタラス河畔の戦いであり、その第三節にその推移が語られる。

第四節では、まさしくこのタラス河畔の戦いの年に長安を発って<sup>けいひん</sup>劇賓すなわちカーブルへ派遣された、唐の使節団の旅を検討する。先に述べた悟空とは、この使節の一員がインドで仏僧になったときの名前である。

稲葉氏は桑山正進氏の所説などによりつつ、この時代に中国からインドに入るルートが、六世紀半ばの前後でカラコルム西端を通るルートからヒンドゥークシュ西端を通るルートへと変化したこと、ところが、この八世紀半ばの使節団はヒンドゥークシュ中央部をとるルートを選択していることを指摘する。そして、中国-インド間の上記の三ルートを含めた五つのルートについて周辺状況を検討し、八世紀半ばのこの使節によって、ヒンドゥークシュ中央ルートが選択された理由を明らかにする。この時点でヒンドゥークシュ東部は唐と吐蕃の係争地であり、またパミール高原西部はイスラーム勢力が迫る地域となっていた。このため唐の使節はヒンドゥークシュ中央部を通る以外の選択肢がなかったのである。すなわち、この使節の動きは、唐からインドへの交通路が吐蕃とムスリムという二つの勢力に東西から挟まれ、残された狭い回廊を進まざるを得なかった状況をしめすものであった。同時に、このルートが十世紀にいたるムスリム勢力と吐蕃勢力の境界であったと指摘される。

第4章は、イスラーム勢力におけるアッバース朝革命とタラス河畔の戦いが終わった直後の情勢を、安史の乱の際に唐に参戦したとされる「アッバース朝軍」の正体を通じて検討している。いわゆるアッバース朝革命研究では従来見過ごされてきた重要な指摘がなされる章である。

第一節は、安史の乱に関する最新の研究を通して、その経緯を概説する。近年の唐代史研究で急速に研究の進んだソグド系突厥とは、東アジア北部の農牧接壤地帯において遊牧系突厥と商業民ソグドが政治・経済面の連携を超えて融合した存在であり、テュルクの軍事技術とソグドの文化・商業ネットワークをとともに継承したとされる。史上有名な安祿山もまたこのようなソグド系突厥のひとりである。彼は突厥第二可汗国の政変を機に唐にうつり、唐の軍事体制の変化に乗じて頭角を現し、玄宗皇帝の元で国軍の中枢にかかわったのちに反乱を起こした。安祿山およびそれを継承した史思明の乱は763年に終結したが、これを機に唐は西域方面へ影響力を失い、これが中央アジアの歴史にも大きな転換をもたらした。そして中国史書は、この戦いにアラブやムスリムを指す「大食」が援軍として参戦していたことを伝えている。

第二節と第三節は、この唐を助けた「大食」が何者かを検討するべく、同時期のアッバース朝と東方領域の政治動向を検討している。まず稲葉氏は、タラス河畔の戦いののちにアッバース朝から送られたと中国史書に残される「黒衣大食」の使節や、上記の唐への援軍である「大食」が、実際にアッバース朝カリフの送った使節や援軍であったのか、という疑問を立て、アッバース朝中央の政治状況から、これを否定する。アッバース朝中央においては、ウマイヤ朝勢力との戦いに続いて、革命の功労者であり東方地域に強い支持勢力を持つアブー・ムスリムの肅正、またそれに続く東方領域の反政府反乱の激化によって、統治体制が大きく揺らいでいた、このような状況の中で、少なくともアッバース朝カリフ政府が、遙か遠方の唐への援軍や使節を派遣する余裕はなかった、と稲葉氏は指摘する。この指摘は、初期アッバース朝研究者であれば誰もが首肯するであろう。一方で、ホラーサーンにおけるアブー・ムスリム支持者たちの反乱と同時に、またそれらの残党を受け入れつつ、より東方のソグディアナとフェルガーナにおいては、ゾロアスター教イラン文化とインド文化の混淆した文化が形成されており、これらがアッバース朝に対するムカンナアの反乱やそれを支持する「白衣者」とよばれる集団の運動と深く関わっていた。

中国の史書には、アッバース朝成立以降の早い時期に「黒衣大食」からの使節や、「白衣の使者」が唐を訪れたと記録している。ギブはこの前者について、カリフからの直接の使者ではなくホラーサーン総督が独自に派遣したものであるとし、そのような伝統がクタイバ・ブン・ムスリム以降の各ホラーサーン総督に受け継がれていたと示唆している。稲葉氏もこれを受けて、後者の「白衣」の者たちも反アッバース朝勢力が派遣した使節である可能性を示唆し、唐に入朝した「大食」のすべてがカリフからの派遣であるとはいえないのではないのかとする。そして第三節において、稲葉氏は、安史の乱に援軍として現れた「大食」の軍隊を検討する。まず、これもギブの研究によりつつ、7世紀前半の中央アジア・アフガニスタンや安史の乱に際して入唐した「大食」とは中央から離脱した非正規軍の傭兵であるとしてギブの所説を支持する。次に、当時のフェルガーナは、その地勢や唐の影響力の強さから、東方における反アッバース朝勢力が逃げ込む先であったとする。非正規軍としてフェルガーナの軍とともに唐に到達したのはそれらアッバース朝への叛徒からの「難民」であったとして、稲葉氏はギブ説の先へ進む。そして稲葉氏は、このような傭兵が唐で受容された要因として、ソグディアナのチャカルと呼ばれる傭兵制度がユーラシア大陸の東西に影響を及ぼしていたことを指摘する。チャカルはソグド系の軍事力が用いられた安祿山の軍やアッバース朝の軍事制度にも影響を及ぼしており、安祿山と敵対する唐の軍団においても、大食らの援軍をこの制度の影響下に使用されたと考えるのである。

最後にエピローグにおいて8世紀末にインドから帰還した僧悟空のたどったルートを検討し、稲葉氏は本書を終えている。

以上、一般書である本書の内容を若干詳細に紹介した。本書は、歴史叙述の中心として取り上げられることの少ない、この複雑な地域を通り過ぎた集団や人びとの姿を、二百年間のタイムスパンで見事に描き出している。一方で、その筆致は抑制が効いた控えめなもので過度の推論・断定を排している。にもかかわらず、その行間からは、非常に大胆な歴史像が浮かび上がってくるのである。優れた歴史学研究成果であり、また現代を中心とした地域研究の読者にとっては、「地域研究を歴史学で行う」ことの意味を明確に投げかけてくれる必読書であるといえる。

特に、第2章におけるカーブルとザープリスターンにおけるハラジュ勢力の伸張に関する議論はその精緻さにおいて圧巻であり、また第3章第4章における使節のルート選択や大食軍の入唐に関する議論は、史料に描き出される小さな現象を、中央アジア・西アジアをめぐる巨大な政治勢力の伸張と対立の中から読み解

いており、歴史学の醍醐味を堪能させてくれる。

このように、本書はあらゆる点において優れた著作であり、評者も多くのこと学ばばかりなのであるが、書評を請け負った責任として、本当に些細な点のみをいくつか指摘かつ補足しておこう。

実は、本書を読み解く上で一番苦労したのが、豊富に掲載された地図の問題であった。極めて多くの地図が、本書の読解を助けてくれるのであるが、各地図に記載されている地名にばらつきがあり、AとBの位置関係を確認するために、Aが記載されている地図とBが記載されている地図を探し出して頭の中で組み合わせる作業が必要となった。一枚物の決定版地図を収録するか、索引の地名に地図情報も記載されていれば、本書を読み解く楽しさははるかに増したのではないかと思う。出版・編集作業の問題でもあり、無理な要望を出していることは自覚しているが、ここが工夫されていれば本書の魅力はさらに増したことと思う。ちなみに、157頁の地図11は地図12、地図4は地図5の誤りであろう。

次に、記述面であるが、アッバース朝の教宣活動と関連して、140頁に「カリフ権のあり方についてもすでにアブドゥル・マリク以降ウマイヤ朝において変質が始まっていた」として「ヒシャームの別荘の事例」が挙げられており、この事例はウマイヤ朝カリフが「やってはならないと思われていたことができてしまう、特別な存在＝帝王だった」証拠としてあげられている。ウマイヤ朝カリフが後世、特にアッバース朝下のウラマーたちによって「帝王 malik」と定義されたことはよく知られている事実である。一方で、アブドゥル・マリク以降のウマイヤ朝カリフは、第二次内乱の関係で自らの「イスラーム的支配の正統性」を確立する必要に迫られていたことも事実ではないか。岩のドームを初めとしてエルサレムのイスラーム化を急速に推し進めたことだけでなく、貨幣や度量衡の改革、行政用語のアラビア語化もその一環ととらえることも可能である。そしてワリードの時代に中央アジア・アンダルス征服が拡大するもの、やはり「イスラーム的的正統性」をウマイヤ朝カリフが模索していたためではないだろうか。そういった試みの延長線上に、スンナ派によって唯一「正統カリフ」と並んで賞賛されるウマル2世の治世がうまれるとも理解できる。結局このような試みは有効に働かず、ウマイヤ朝は倒されてしまうが、第二次内乱以降にウマイヤ朝カリフの帝王化が進んだという理解には、このように正反対の解釈を提出することも可能であるように思う。

また第3章141頁、アッバース朝の黒旗であるが、稲葉氏が挙げられた理由以外に重要なものとして、イブン・アウサム・クーフィーはこれをアリー家の殉教者（具体的にはザイドとその息子ヤフヤー）への弔意を示すものと述べており、イブン・ハルドゥーンも『歴史序説』で「ハーシム家の受難者の喪章」としている。アッバース朝革命の性格をよく示す解釈として補足しておきたい。

さらに細かいところでは、190頁に「マフディーとは『救世主 (messiah)』のアラビア語形」とあるが、messiahのアラビア語形として妥当なのは「masīh」の方であろう。クルアーンにおいてもイムラーン家45節に「マシーフ・イーサー」の用法がある。マフディーは「救世主の意味を持つようになったアラビア語」とすべきかと思う。

また、稲葉氏のチャカルについての叙述をさらに展開する事例も、せっかくなので補足しておきたい。9世紀後半のアッバース朝においては、奴隷軍人がカリフを傀儡として権力を掌握するが、この時期、バグダードを中心にシャーキリーヤという軍団が現れる。この軍団は、ホラーサーンを支配するターヒル家出身のバグダード警察長官と強い関係を持つものとみられるが、この名称は明らかにチャカルのアラビア語系である。その性格はこれまでも議論されてはいるものの、十分に明らかになっているとは言いがたい。常備軍であるジュンドとの親和性が非常に高く、史料中に「ジュンドとシャーキリーヤ」との組み合わせで頻出することが知られている。いずれにせよ安史の乱において、唐軍がチャカルの影響で備兵を受け入れた一方で、アッバース朝中央においても、奴隷軍団のみならずはしっかりとチャカルの影響を受けた軍団が存在したのであり、稲葉氏の指摘する「チャカルのユーラシア大陸レベルの影響」は確かに見て取ることができるのである。

以上、あくまで蛇足であったが、繰り返すように、本書は西アジアの歴史学を志すものにとって必読の書であり、また地域研究をめざす若い研究者にもぜひ一度手に取ってもらいたい好著である。ひとつの「地域」が持つ歴史的な重層性とその隣接空間との関係性を垣間見るという意味でも、刺激的な読書経験となるであろう。現代から遠く離れた時代に関する研究であると敬遠せず、一読を試みてほしい。巻末には「もう少し学びたい人のために」と題して参考文献解題も付されている。自らの知見を拡大するのに大いに役

立つであろう。

本書が「学術書ではない」とは稲葉氏自身の言であるが、わずかしか史料の残らない困難な地域・時代を研究しても、多言語を駆使し、また多様な史資料を論理的につなぎ合わせることで、これほどの豊かな歴史を再構成することができるのである。

稲葉氏に心から敬意を表したい。

(清水 和裕 九州大学人文科学研究院教授)

---

**鈴木麻菜美『信仰と音楽は国境を越えて——オーストリアにおけるアレヴィーの議連実践と継承』春風社  
2024年 290頁**

「信仰と音楽は国境を越えて」。魅力的なタイトルである。人類が普遍的に持ち続けるだろう信仰と音楽という感性が、異なる環境において、いかに継承されるのか。この壮大なテーマはこれまでも多くの研究者が様々な視点から挑んできたものである。著者はそれに対し、自らの出自から生み出された音楽や信仰への強い関心と感性で、正面から果敢に挑んだ。

本書は、著者の数度にわたるトルコ共和国(以下、トルコ)でのフィールドワーク、及び、1年間の継続的なオーストリア共和国(以下、オーストリア)でのフィールドワークで得た資料や、関連する文献を分析し、著者が2020年に国立音楽大学に提出した博士論文を書籍化したものである。本国トルコにおけるアレヴィーの宗教儀礼で実践される音楽(デイシュ)と旋回セマーフ、及び、オーストリアに移住したトルコ出身のアレヴィーが実践する宗教儀礼における音楽とセマーフと継承の場に焦点を当て、彼らの音楽・セマーフという「宗教的自文化表現」が、トルコからオーストリアという異なる環境下でいかに変化するのか否かを検討した、大作となっている。内容は4部構成で以下の通りである。

はじめに

序論

第I部 アレヴィーと音楽

第1章 「アレヴィー」とは

第2章 アレヴィーと音楽のかかわり

第II部 オーストリアにおける移民とアレヴィーの信仰

第3章 オーストリアのトルコ系移民とその他の移民コミュニティ

第4章 ディアスポラ・コミュニティにおけるアレヴィー

第III部 オーストリアにおけるアレヴィーの音楽

第5章 ディアスポラ・コミュニティにおけるジェムと音楽、セマーフ

第IV部 結び

第6章 結論

おわりに

付録(譜例・歌詞)

参考資料

索引

まず「はじめに」で著者の本研究への思いが述べられたあと、序章では研究の目的や本書の論点を浮かび上がらせ、そこからその論点に即した先行研究の検討を行い、本研究の問題の所在を提示している。

本書の第一の目的は、本来の場(トルコ)とは異なる環境下(オーストリア)でのアレヴィーの音楽実践の把握である。そのための研究の論点としてあげられるのが、「アレヴィーの音楽」、「移民および移民の音楽」、さらに「マイノリティの音楽」である。ここでは、辞書や概説書などからそれぞれの用語の概念的な整理を